
エゴの果ての自我

かわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エゴの果ての自我

【Nコード】

N1095P

【作者名】

かわ

【あらすじ】

ありふれた日常を心から楽しんでいた彼女に訪れたのは、彼女にとって無情な変化だった。突然その中に放り込まれた彼女は

夢も希望もない異世界トリップです。バッドエンドではありませんがハッピーエンド以外が苦手な方はご注意ください。

ありふれた平穏な日常を彼女はこれといった不満もなく楽しんでいた。

試験前日に頭に詰め込んだ内容を回答欄に移しきれず終わったことも、返却された答案に友人たちと騒ぐことも、憂さ晴らしと称して遊び歩き親に小言を貰うことも彼女には当たり前前で、そして大切な日常だった。

そんな一日を満喫し、心地よい疲労に横たえた身が感じた愛用の寝具の温かさは一瞬で消え去り、代わりに彼女を包んだのは硬く冷たい湿った石の感触だった。

その変化はあまりにも突然で、彼女にとっては絶望的なまでに馴染みのない、彼女の愛する日常からかけ離れたひどく現実味の薄い異変だった。

違和感に目を覚ませばそこは見慣れた自室ではなく、底冷えのする洞窟のような部屋だった。四隅に篝火が焚かれて尚薄暗い室内には幾つか人影があった。男か女か、歳の頃も彼女にはわからない。薄ぼんやりと浮かぶ影は皆、どこかのつぺりした衣で頭から爪先までを包んでいたからだ。

足りない灯りに照らされた壁や天井は均された床と違い自然のままで、氷柱のような天井部から時折落ちる水滴が彼女の頬を濡らす。その冷たさが、そして何よりこの場に渦巻く威圧的ともとれるどこか張りつめた空気と彼女には理解できない言語や細かな音たちが、ひどく現実味の薄いこの状況が夢ではないと教えていた。意図せず彼女の歯がカチカチと断続的に触れ合う。最初は肌寒さから、そして徐々に押し寄せてくるこの異常が現実として彼女の身に起きていくという、得体の知れない恐怖から。

無意識に震える肩に己で触れたとき、彼女にほど近い位置で佇ん

でいた人影が動いた。かすかに衣擦れの音を立てながら近づいてくる影に怯え、彼女は逆に影から遠ざかろうと後ずさる。影が近づくとつれて確実に他から向けられた視線の緊張が高まるのを感じる。心臓がかつてないほど大きくせわしく脈を刻んだ。何がどうなっているのか、なぜ自室で寝ていたはずの己がこんなところにいるのか。当然のごとく浮かんだ疑念は、けれど一定の間隔で近づいてくる影への恐怖に追いやられて消える。

そらした瞬間に襲いかかられはしまいか。恐怖し影から目を離せないまま、力の入らない足にさえ気づかず腕だけでもがいて必死に後ずさった。と、ついた手が縁から落ちて体もバランスを崩す。妙にゆっくりと移動する視界に石造りの台座が映った。今まで座っていたらしいその向こう側から、一気に距離を詰めて伸べられた腕が触れた瞬間、彼女は喉が裂けんばかりに絶叫した。

自分の身に何が起きたのか。ここはどこなのか。自分はなぜここにいるのか。

そのどれにも答えは与えられなかった。与えられたのは紙のように衣服を破られた衝撃と、乱暴に何度も身を貫かれる耐え難い痛みだけだった。

彼女の愛する日常には決して訪れることのなかった暴力に、けれど容易く意識を失えなかったことでより深く植えつけられた絶望だけだった。

厚いカーテンが引かれた室内は日中であつても陽が差さない。それでも元々陽の当たらない地下や夜とは違い、布地越しに入り込むやわらかな温かさがあつた。そのぬくもりすら拒絶した少女は何かを恐れるように、本来は貴人が入り込むことはしない衣裳部屋へ潜り込んで侍女を困らせた。多くも少なくともない衣装が揃えられた

その部屋の隅で、一枚布にくるまって膝を抱える少女が何を恐れているのか、侍女には理解できなかった。なぜなら少女の元へは、二日と空けることなく侍女の主であり国主である男が通ってきているからだ。

前国主の代までであった後宮は現国主によつて国費の無駄と断ぜられ解体された。重税に喘いでいた国民は軽減された税に喜び、善政を布く国主を慕った。平民であった侍女が王宮に勤められるのも国主の改革ゆえだ。学を得て職を得て、希望を得た彼女はそれを与えてくれた国主を他と同様に慕い敬った。しかしそれゆえに侍女は国主を頑なに拒否する少女を疎んだ。唯一少女についている侍女は国主がどれほど少女を気にかけているかを知っていた。何の地位ももたない、国主にとつて得など一つもないだろう少女に豪華な部屋を与え、高価な装飾品やそれらがより美しく見せるきらきらしい衣装を数えるのも一苦勞なほど贈られている。にもかかわらず、国主が訪なうたびに絶叫し激しく拒絶の意を示す。時には国主の麗々しいかんばせに傷さえ作ることもある。そのたびに侍女は感情のままに少女を虐げたくなる衝動を抑えることが大変だった。

着替えや食事を促せど拒否されれば拒否させたまま、宮内の医師に診せ衰えすぎない程度を保つだけの侍女の怠慢はけれど誰にとがめられることもなかった。それを暗黙の内に己の振る舞いを了承するものと信じて疑わなかった侍女の行いは次第に節度を失つていった。

少女を死なせないようには務めていた侍女は、医師が少女にその告知を下した数日の後、抑えていた衝動を開放することを己に許した。

「それで、その人はどうなったんですか？」

「人間、知らない方が務めやすいこともあるのよ」

宮内の特に頻繁に使う通路や部屋の説明を受けていたはずが、いつの間に脱線したのか最近はやっているという噂話を聞かされていたミオは、歯切れの悪い終わり方に少々不満を抱いた。けれど確かに彼女の言うとおり、国主に横恋慕した末に凶行に走った侍女の話など、これから宮勤めを始めようとする自分には幸先の良い話にはどう転んでもならないだろう。

気を取り直して再開された各所の説明を注意深く聞きながら、やがて受け持ちの最後の場所へとやってきた。

「この辺りは国寶の方しかご案内しない部屋だから、特に主人の不在は気にしないでいいわ。でもどなたか滞在されるってときには一層注意してね。何か失礼でもあったら文字通り首が飛ぶから」

場合によってはそれでも済まないこともあるしね、などといった風り笑いながら告げる彼女に生真面目に頷くと、たまらずと言った風に笑われる。それで初めてからかわれたのだと気づいたミオは形だけ怒って見せたものの、けれど気のよさそうな同僚に出会えたことで自然と緊張していた体から力が抜けた。

その後細々とした注意事項を受けながら初日の職務をこなしたミオは、翌日から本格的に勤務するための備品整理や教えられた注意事項を覚えなおしたりして午後を過ごした。物忘れが激しいと自覚のあるミオは、頭に叩き込んで刻みこむつもりで自筆のメモをめくる。順に読み込んでおぼろげに唱えもしているうちに、先ほど盛大にからかわれた注意事項にたどりついてふと考え込んだ。ミオの受け持ちの区画には、普段は使われない部屋が多い。その分気が緩みがちになって粗相をしてしまうこともあるだろうと考えると、先ほどの文句はあながち嘘とは言えない。働く場所が場所だけに己のミスが家族にまで伝播する恐れがあると思えば、明日からの務めにも緊張感をもってあたれるだろう。

注意事項の確認を終え、支給された仕事用具の確認をしておこう

と、ミオは使用人棟へ向かった。ミオのいる建物の蔭からなら中庭を抜け本宮を横断すれば使用人棟はすぐではあるが、時間にゆとりもあることだしと外庭を通っていくことにする。貴人やその他の人の行き来が少ないと教えてもらったからこそできる贅沢に、本当にここに勤められてよかったと己の幸運をかみしめる。

しかしふと、推薦が必要なこの職になぜ自分などが付けたのかと疑問が浮かんだ。人並みの学はあれど、これといった伝手など自分もその周りの人間も持っていないはずだ。それともミオが知らないだけで近しい誰かがこの職への伝手を持っていたのだろうか。その誰かはなぜミオへこの名誉ともいえる職を回してくれたのだろうか。

考えに没頭するうち、次第に周囲の音が遠のいていく。けれど集中は不意に感じた視線に途切れる。感じたままに顔を上げれば、美しく整えられた植え込みの向こうに一人の青年がこちらを見て佇んでいた。

青年の整った面差しはしっかりとミオに向けられている。首から上だけでなく、端正な彼の姿にミオは頬に熱を感じた。一度でも会えば、きっと自分は彼を忘れない。けれど、どこかで見知った人のような気がするのはどうしてだろう。見つめあうことしばし、突然頭にかかった圧力に、ミオは慌てて転びそうな態勢をどうにか踏ん張って耐えた。

「バカ！ あんた何オリア様にガン飛ばしてるのよ！」

小声で怒鳴りつけてくる器用な同僚の言葉に驚き、一層深く頭を下げると遠ざかる足音が聞こえた。それが十分遠のいてから二人は漸く痛み出した腰を元に戻した。と、同時に今度は小声ではないが大きくもない怒鳴り声で彼女が怒り出した。

「もう、この馬鹿ミオ！ お偉いさんにかちあつたら即座に頭を下げるって言うておいたでしょう？ 温厚なオリア様だったからよかったものの、もしあれが宰相のイグル様だったりしたらお手打ちにされたわよきつと。いい、初日でやめさせられなくなかったら、貴人

の服装と礼儀だけでも叩き込みなさい」

しゅんとして反省してみせると、彼女は厳しい表情を和らげて「あの顔を鑑賞したくなるのはわからなくもないけど、見るならとおくからこっさりね」とふざけて見せてどん底まで沈みかけるミオを呼び戻してくれた。

オリアという彼に見覚えがある気がしたのは、きっと貴職についているらしい彼をどこかで見かけたことがあったからなのだろう。ただでさえ普段からおぼろげな記憶力しかない自覚があるのだからそれを無理に追ってどんな経緯であれ得られたこの職を失うことは避けたい。

早めの夕食に誘われて腹のうずきに気付いたミオは、食後に新たに増えた己の課題を手伝ってくれるよう頼み込みながら、今度は立ち止まることなく使用人棟へ向かった。

その後ろ姿をじつと見つめている影があつたことに、ミオも、ミオをいなす同僚も気づくことはなかった。

新しい同僚と出会った頃の寒気は次第に暑気へと上塗りされていく。そのゆるやかな流れに沿うようにミオも慣れぬ環境に適応していった。

最初こそ段取りの不備や物忘れの多さで使用人頭に渋い顔をさせ、落ち込み、ときに腹を撫でて辛そうにしていることもあったが、今ではある程度仕事成果を信用されるようになった。仕事を順調に運べると人間関係に裂くゆとりも増えたのか、最近では彼女以外の仕事仲間と打ち解けて話している姿も見かける。その姿に若干の寂しさと多大な安堵とを感じながら、彼女は自らもミオ達の広げる話の輪に加わるべく歩を進めた。

いくら誘つても外に出たがらないミオの行動範囲は狭かったが、それでも公私ともに日々充実しているためかミオはいつも楽しそうにいろいろな話をした。ほかの使用人仲間から聞いた宮内の噂話に始まり仕事での失敗、極偶に遠くに住むと言う家族のことをそれは嬉しそうに彼女へ伝えた。彼女は彼女でそんなミオを故郷においてきた既知の友人と重ねては懐かしく思った。だからだろうか、彼女はミオが時折ダルそうにしたり無表情で呆ける間隔が短くなっていることに気付いた。聞けば疲れやすい体質のようだと言った。同時に、次は休むミオになるべく無理は避けるように苦言した。同時に、次の休みには気が休まると仲間内で人気の茶葉を買って来ようと決めた。しかしそれは実現しなかった。ミオが突然宮を去ったのだ。

急すぎるそれに彼女は使用人頭に説明を求めた。暫しの沈黙のうちに返されたのは小さな一言だった。それは宮仕えする子女を稀に見舞う嵐だった。ミオは貴人に見染められたのだ。ゆっくりその事実を飲み込み、ミオの様子に思っていたらと彼女は祈らずにいられた。なかった。

貴族にとって戯れに手を出した、それも身分の低いものが優遇さ

れることはまれだと彼女は知っていた。それでもどうか、ミオの進む途に光があふれるように。ミオとミオの腹に宿った子供の平穩であることを、彼女は願った。

今世王の御代に粒盛期が来た。記録によれば前会の巡りよりやや早い訪れに、官吏らは進めていた準備を更にいそがせた。

法技が遅れたことにより力ある粒子の増加に伴う被害報告が幾件も報告された。個々は取るに足らぬ小さな問題だが、その数と留まらぬ粒子が増加するにつれ、添うように深刻さを増す害はやはり異常としか言えない。

建国以前よりほぼ一定の間隔で起こり続ける力ある粒子の増加の波の原因は今をもつてしても解明されていない。わかっているのは粒子は微弱ながら魔の性を帯び、増えすぎたそれは人の意識を犯すと言ったただそれのみ。一時的とはいえ打開案を見つけ出したかつての統治者たちに報いるべく、我々は粒子の研究をより発達させるべきである。

法技の仕度がすべて整ったと報告を受けてすぐに儀を執り行った。力ある粒子が増加するのであれば、その力を大量に消費する術を執り行えばいいのだ。それには平素ならばまず起動さえ出来ぬと言う召喚術は、まさにこの大事のために生み出された技なのだ。大きすぎる力の暴走は召喚の発案より二代後から執り行われ始めた通り媒体となる一人を用意することで抑えた。そして貧相な身なりの娘が現れた。陛下御自ら娘の容姿を確認したのち、資格ありと判ぜられた娘に種子を注がれたことで法技の成功をおさめた。

遡ること数代。ある酔狂な統治者が召喚した娘を娶った。それまで目立った功績のなかった統治者は娘を娶って以降広げた国土は当時継いだ国土とほぼ等しい。その勲功にあやかるためにと、娘と似通った容姿の娘が召喚された折は妻に据えることが慣例化された。

しかし今期召喚されたのは娘と同じ瞳と肌を持つてはいたが、暗がりで見誤った髪色は黒ではなく瞳と同じく濃茶であった。間をおかず開かれた談合で娘の処遇を決める間、陛下はたびたび席を外した。不審を覚え調べさせれば行先はかの娘に一時的に与えた居室であったことに危機感が募った。まさか、陛下はあの娘に傀儡とされているのではないか。考えてみれば不思議はない。どことも知れぬ異界から迎えた存在だ、これまでの召喚者に関する記述は多くないが、彼らが我々には計り知れぬ何かを宿している危険さえないとは言えないのだ。そう察してからは、娘をそのまま妃に据えようと言う主張に猛然と反対した。国の先を見据えての私の主張はけれど頑迷な陛下の崇拜者と臆病者どもの同意は得られなかった。それでも慣例通りかの娘の御子を後継者とすることは認めど、娘を妃に据えぬことだけは承服させた。

天の采配か娘は精神に異常をきたし長い妊娠期の殆どを伏せて過ごすも、しぶとく次代を生み落としたのち内々に処理を命じた。

長く続いた王国の最後の王に仕えた、ある臣下の手記より

昔話をしよう。愚かな少女の話だ。

ぬるま湯の中で生まれ育った少女はそれがどんなに得難い僥倖とのめぐりあわせかを自覚することはなかった。ただ甘えることしか知らない少女は自分の意思が無視され、もののように扱われ続ける現実から逃げ出した。守られるだけの平穏な頃にも似た夢の中で笑いながら、けれど少女は夜毎現実に取り戻されては逃避が叶わないことを徐々に思い知らされていった。己の体に現れた変化もそれを助長した。違和感と嫌悪の対象だった腹はけれど膨らんで反応を感じるたびに少女の心をぬるく撫でた。少女はそれが愛情だとは思わ

なかった。なぜならそれを齎すのはほかならぬ己を苦境に落しこんだ一人だからだ。しかし変わらぬ少女の心を撫でるそれを、時を経ほど少女は腹の中の異物を嫌悪することができなくなっていった。ならばそれはもう自分にはどうしようもない、本能なのだ少女は受け入れた。枷を一つ外した少女の精神は早急とは言えないまでも遅いとは言えない早さで本来のそれへ戻っていった。

少女、いや、ミオにとって子供は生まれる以前もその以後もかけがえのない大切な存在だった。だからこそ子を奪われ再び外と隔絶されようとした時には、以前のようにされるがままではいなかった。もともとの体力の差も、己の体が疲弊しきっていることもその時のミオには関係なかった。抵抗は長くは続かず、ミオから子を奪いに来たうちの一人が衛士のような風体の一人にミオを屠るよう命じた。迫る衛士に身の危険を感じたが、それ以上に子と引き離される怒りがミオを突き動かした。

それからの怒濤のような展開をミオが直接見ることはなかった。寸前までミオを囲んで静観していた誰かの声が上がると同時に、どこから湧いてきたのか大勢の見たことのない服装の兵士たちに啞然とした。そして間をおかず、ミオの面前には見たことのない部屋が映っていたのだから。驚いて辺りを伺えば、すぐ後ろに立つ人影に気づいた。一目見れば忘れないだろうこの人を、ミオはおぼろげながら確かに覚えていた。呆けたミオが声を出すより先に忽然と消えた彼を見て、ミオはやっと自分が踏みしめる大地そのものが故郷とは違うのだと思い知った。

その後、ミオの人として最低限の尊厳を踏みにじったかの国が滅ぼされたことを世話係についでくれた女性から、ミオの今後の身の振り様や特に知りたくはなかったがかの国の隠された所業とあの時の兵士たちの属する機関、ミオをここへ連れてきたオリアの役職などをオリア本人から聞かされた。けれどそのどれもがミオにはどうでもよかった。その時のミオにとって必要なのはただひとつだけ。

その唯一をミオから引き離すと言うのなら非道を繰り返してきた亡国も、制裁を与えミオを救い出してくれたと嘯くオリア達審問機関も、どちらも敵的でしかなかった。そうとは悟らせないよう、けれど一方的に告げられたそれに再度取り乱すことがなかったのは、単に起き上がる体力すらその時の体調では賄うことができなかつたからだ。けれどその感情も弧を描くように降下し、底辺張り付いたように何事にも心を動かすことがなくなつた。

そこでの暮らしはあちらほどひどくはないが、故郷ほどミオを満たしもしなかつた。体調が快復して後与えられたオリアの身の回りの世話を淡々とこなす澁の心には、埋まらないウロがぼかりと口を開けていた。それなりに打ち解けて話せる友人、好意を寄せてくれる者、冷徹さを滲ませていたオリアにさえ必要以上に氣遣われたが、感情にかかつた薄い靄と喪失感だけは長く埋まらなかつた。ひたすら平坦にすぎる時間に身を任せた。

元いた地で過ごしたよりも長い時間をここで過ごす間、いろいろなことがあつた。新しい友人ができ、些細な争いに巻き込まれ、友人たちの門出を見送り、見送られた。オリアの視察という名の世界を股にかける放浪に付き合わされるうちに処世を覚え強さを身につけた。長年使つていながつた残念なおつむを擲掄されて薄らとむず痒い熱を感じた。ひそかに鍛錬しその成果でもって報復とすれば滅多にない苦笑を見つけ居心地の悪さを覚えた。治安の悪いところへでも赴けるよう身につけた護身術と一緒にオリアが視察先で教え広めている奇術も学んだ。一見何もない場所から火や水を生むそれは最初こそ手品や奇術に思えたが、難易度をあげもつと発展させた不可思議さは手品や奇術よりもむしる魔法のようだった。原理を尋ねるミオに、オリアは力ある粒子を利用するのだと言つた。これが広く使われるようになれば、誰を犠牲にしなくても粒盛期を越えられるようになるだろう、と。

力ある粒子は世界中のどこにでもあり、他のどんな物からも影響を受けることはないが、逆に他のどんなものにも影響を及ぼした。

粒子はあちこちの地で増減を繰り返す。溢れることはないがなくなることもまたなかった。増えすぎれば害になる粒子への対処はどの地方のどの国でも重要な問題で、各々が各々の方法で対処法を編み出していた。その結果の一つがミオであり、オリアだった。

ミオがこの地へ来てどれほどの時が経っただろう。欠けてしまった心の機微を取り戻し、心の底で懐かしみ帰りたいがっていた故郷への郷愁も消えた。引き離され、生涯を幽閉され、ついに会うことが叶わなかった子供も年老いて天寿を全うして尚有り余る時をかけて、ミオはゆつくり少女から女性へと成長した。それが元の世界との時差によるものか、力ある粒子によって召喚された者への宿命なのかはわからない。けれどミオが老いたその後もオリアは生き続けるだろう。ミオに会うずっと以前から粒盛期が訪れる度一身にそれらを受け入れてきたオリアは、出会った頃と変わらない容姿をたたえていた。

魔法の普及はきつと次のミオとオリアを作らせない有効な手段となる。それがどのような意図で使われようと二人は関心を持たない。ただ一人の犠牲の上に成り立っていた平穏が発展しようと衰退しようとしてそれによって動かされるには人から長く離れすぎた。

ミオは己の心を動かす今は唯一の存在となった傍らの男を見上げる。それに気付いてかこちらへ視線を返したオリアとの距離は出会った頃よりほんの少しだけ近づいた。

「どうした」

「…何でもない」

ミオは確実にオリアより早く世を去るだろう。今はまだ遠いその時残されるオリアを思うとかすかに胸が痛んだ。その痛みによって、まだ自分の内には人の心が残っていることを確認する。それが自己満足だろうと同族への憐憫だろうと、ミオがミオとしてここにいることを確かめられるのならばかまわなかった。

「なに？」

「うっん。…寒いね」

熱を求めるようにすり寄り寄るミオに脱いだ上着を貸し与え、オリアは適所に火をおこした。大気に溶けた粒子ではなく、オリアの体に溶け込んだほんの一部を消費して燃える火だ。

「早く暖かくなるといいね」

「…そうだな」

薪のはぜる音もなく静かに揺れる炎が、辺りに満ちていく闇を退けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095p/>

エゴの果ての自我

2011年1月8日15時49分発行